

大学生の英語学習実態

——伸ばしたいスキルと学習内容の差異について——

加藤 あや美 山田 敦子

Observations of University Students Language Learners:
The Difference between What They Want To Be and What They Can Do

Ayami KATO and Atsuko YAMADA

1. はじめに

英語は小学校から必修科目となり、中学校、高等学校を含め、日本人は学校教育の中で英語学習にかなり多くの時間を割いている。また、大学教育においても、英語は専攻分野を問わず多くの場合卒業必修の教養科目と位置づけられており、日本人は学校教育を通して継続的に英語を学んでいることとなる。しかしながら、坂田・福田（2011）によると、日本人が実用的な英語レベルに達するには2000～5000時間が必要とされ、一見長時間をかけて英語を勉強しているように見える日本の学校教育でも、このように膨大な時間を授業として確保することは実質的には困難であると述べている。足りない部分の時間数を学習者がいかに補うか、また実際に補うことができているのかどうかということが重要なカギなると言及しており、継続的な自律英語学習の必要性が指摘されている⁽¹⁾。多くの時間を充てて勉強しているように思える英語であるが、実用的に使用できるレベルに達するまでには学校教育の時間数だけでは補うことができないことがわかる。そのため、坂田・福田（2011）で指摘されている通り、学習者自身が自らの学習時間を確保して英語学習に取り組む必要があるのではないかと考える。筆者らは、社会人の英語学習者に焦点を当て、学校以外で英語学習に取り組む学習者がどのような英語学習に取り組み、どのような英語のスキルを向上させたいと考えているかということについて調査を行い考察してきた⁽²⁾。この結果を踏まえ、本稿では大学生の英語学習実態に着目し、オンラインによるアンケート調査から、大学生の具体的な英語学習実態について明らかにし、実用的な英語使用レベルに達するために必要不可欠であると考えられる自律的な英語学習を大学生がどのくらい実践しているかということについて示していく。

2. 研究の背景

高校1年生を対象とした調査において、23.9%が学校の授業以外で英語や英会話を勉強していると回答している（ベネッセ教育総合研究所 2019）。この調査結果によると、学校の授業以

外の英語学習方法として挙げられていたのは、「学習塾」53.9%、「書店で売られている教材」16.4%、「英会話教室」15.5%、「塾などの映像授業」11.2%、「通信教育の英語教材」9.5%であった⁽³⁾。この結果から、3年間を通して英語科目が設定されていることが多い高等学校の生徒でも3割弱しか授業以外の英語学習に取り組んでいないということがわかる。なお、この調査では、授業以外の英語学習にどのくらいの時間を費やしているかというデータは確認できなかった。

国立教育政策研究所（2016）は、大学生等の学習実態についての調査結果を発表している。その調査によると、大学生の1週間当たりの学習時間として挙げられていた項目は「大学の授業」「大学の授業の予習・復習など」「卒業論文・卒業研究」「大学の授業以外の学習」の4項目であった。それぞれの学習時間は学年により時間数にばらつきがあるが、平均は「大学の授業」15.2時間、「大学の授業の予習・復習など」4.7時間、「卒業論文・卒業研究」3.7時間、「大学の授業以外の学習」3.5時間という結果であった⁽⁴⁾。これらの学習時間の4項目のうち「大学の授業以外の学習」に費やす平均時間を見ると、1年次2.1時間、2年次2.6時間、3年次4.0時間、4年次4.8時間となり、学年が上がるに連れて少しずつ増加しているという結果が示されている⁽⁵⁾。しかしながら、この結果とは対立した状況も調査結果から明らかになっている。3年次を除いて「0時間」が最頻値であり、特定の学生のみが授業以外の学習に熱心に取り組んでいる状況であるという考察がなされている⁽⁶⁾。この大学生を対象とした調査は英語学習のみに焦点を当てたものではないものの、大学生が1週間当たりに取り組む「大学の授業以外の学習」に費やす時間数が示されており、このデータを基に学年平均すると大学生が「大学の授業以外の学習」に費やしていると考えられる時間は1週間当たり約3.4時間となり、自律的な学習の時間数はかなり少ないということは言うまでもない。この時間数の中に英語の学習時間が含まれていたとしても、実用的な英語として使用できるレベルの英語力を身につけるまでには十分とは言い難い。

大学での英語教育は、高等学校までのそれと異なり、検定教科書等を使用する必要もなく、授業デザインから教科書の選定まで授業を担当する教員がコントロールできる。授業運営側の自由度が高いということは、同時に授業を受講する学生側の観点としても、高校生までの教員主導の学びのスタイルから、授業担当教員によって異なる多様な授業内容を受けられることになる。この違いが、大学生に自律的な学びのスタイルを求めることにつながっているのではないだろうか。学習を自律的に進めるとは、目標を設定し、計画を立て、学習方略を決め、自分をコントロールしながら進めることが必要であるとされる⁽⁷⁾。上記の高校生と大学生を対象とした調査結果を見る限りは自律的な学びのスタイルが構築できていると言うことは難しいであろう。このことを踏まえ、本稿では大学生の英語学習実態について考察していく。

3. 英語を学ぶ大学生の背景と状況

3.1. 協力者の抽出、調査概要

本調査は、2021年12月に Google Form を用いてオンラインにてアンケートを実施した。調査協力者は、日本の東海地区、関西地区の6つの大学に通学する大学1～4年生125名である。なお、一般的な大学生の自主的な英語学習への取り組み状況を抽出するため、外国語学部等、英語を主とする外国語や外国文化・文学を専攻する学生はあえて対象としないこととした。

本研究は、大学生一人ひとりがどのような英語学習を行っているかを探ることが目的であるため、大学での英語の授業での学びではなく各個人が授業以外で実施している英語学習について尋ねた。大学生は実態として、①特にどのスキルを伸ばしたいと考えているのか、②どのような時間配分で実際に学習をしているのか、また、③どのような教材を使用しているのかという観点で調査を行った。なお、これらの観点は、加藤・山田（2021）で社会人英語学習者を対象とした学習実態を調査した観点を参考にした。協力者には、研究目的、方法、参加は自由意志であること、また成績評価には一切影響しないことおよび匿名であり個人が特定されないことを Google Form の冒頭部分にて説明を行い、学生の同意を得た上で実施した。

表1は、協力者の専攻分野および性別の分布をまとめたものである。なお、本調査でまとめた専攻分野は調査への協力を得た対象者の正確な学部学科が特定されないよう、教育系（教育学部等）、人文科学系（人文学部等）、社会科学系（経済学部等）、自然科学系（理工学部等）の4つの区分に分類することとした。

表1 協力者の専攻分野および性別分布

(単位：人)

	教育系	人文科学系	社会科学系	自然科学系	合計
男性	0	14	3	22	39
女性	56	22	3	5	86
合計	56	36	6	27	125

表2は、協力者の学年分布をまとめたものである。2年生から4年生は女性の割合が高く、協力者の性別の割合は概ね女性7割、男性3割であった。また協力者の学年分布については、1年生が最も多く、割合は1年生44%、2年生17%、3年生18%、4年生21%となった。

表2 協力者の学年分布

(単位：人)

	1年生	2年生	3年生	4年生	合計
男性	29	5	1	4	39
女性	26	16	22	22	86
合計	55	21	23	26	125

3.2. 協力者の英語習得レベル

表4は、調査協力者の英語習得レベルをまとめたものである。保有する英語能力試験の級やスコアの記入を依頼し習得レベルを表3の英語習得レベルの判定方法をもとに集計した。協力者には、英検の取得級、TOEIC、TOEFL、IELTSのスコア及び自己申告での英語力をそれぞれ回答してもらった。なお、本調査ではTOEFL、IELTSでの回答は得られなかったため、英検、TOEIC、自己申告の英語力により集計作業を行った。これら3つのデータのうち、どれか1項目でも習得レベル判定に使用した指標に当てはまるものがあれば、それが最も高いレベルであると判定し集計した（例：自己申告レベルは中級であるが、英検準1級保有者は中上級として集計）。

表3 英語習得レベルの判定方法

本論文での分類	習得レベル判定に使用した指標		
	英検	TOEIC	自己申告
上級	1級	860点以上	上級
中上級	準1級	730～855点	中上級
中級	2級	600～725点	中級
初級	準2級以下	595点以下	初級

表4 英語習得レベルの分布

(単位：人)

	初級	中級	中上級／上級	合計
男性	22	12	5	39
女性	26	50	10	86
合計	48	62	15	125

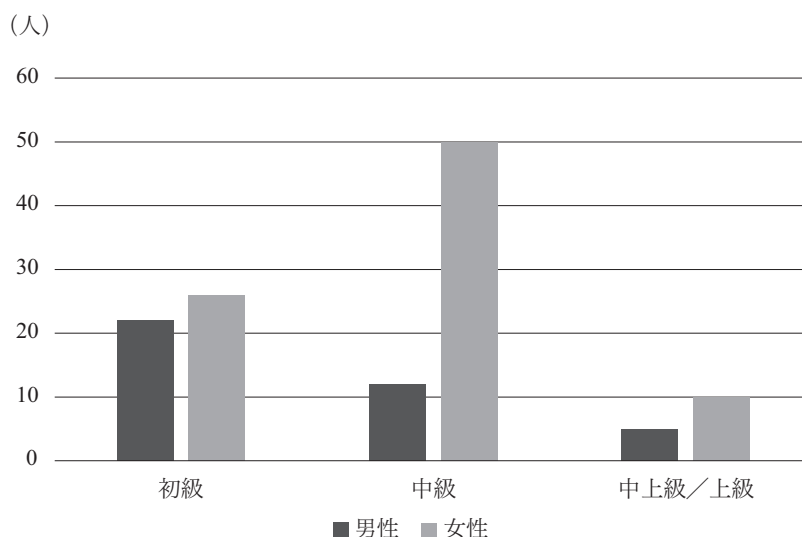


図1 英語習得レベル別の分布

今回の協力者の回答は、英語習得レベルを上級に分類できる数が2名だったため、中上級と上級を同カテゴリーとすることとし、本章以降は上級者を含め、中上級と表記する。

4. 調査結果

4.1. 最も伸ばしたいスキル

調査協力者に対し、「話す」「聞く」「書く」「読む」の4技能について、伸ばしたいと考えているスキル順に1から4の順位づけを依頼し、回答を得た。

(1) 重みづけをした結果

上記の通りの1から4の順位づけを分析に反映するために、回答結果を1→4、2→3、3→2、4→1と置き換え、それぞれのスキルを集計し回答数で徐して、どのスキルをそれぞれ何%伸ばしたいと考えているという数値を求めた。

表5 伸ばしたいスキル (重みづけ)

	話す	聞く	読む	書く
中上級	30.3	23.0	21.7	25.0
中級	33.6	27.8	22.1	16.6
初級	34.3	30.6	23.2	11.8

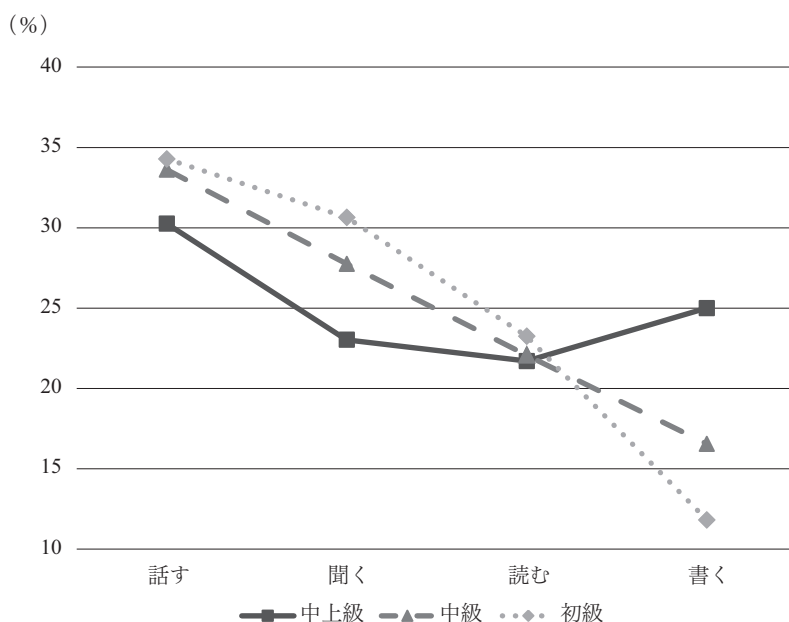


図2 伸ばしたいスキル (重みづけ)

英語習得レベル別に見ると、どのレベルにおいても「話す」スキルを伸ばしたいと考える傾向があることが見て取れる。この傾向は、初級・中級レベルにおいてより強く、中上級レベルにおいては、「話す」スキルの次に「書く」スキルを伸ばしたいという回答が多かった。初級・中級レベルでは、「書く」スキルはあまり伸ばしたいとは考えていないということが表れた。また、「読む」スキルについては、英語習得レベルによる違いはあまりないという結果となった。

(2) 最も伸ばしたいとの回答のみによる結果

次に、「話す」「聞く」「書く」「読む」の4技能について、最も伸ばしたいと回答した「1」のみについて上記と同様の集計を行った。その結果、全回答者の平均は「話す」スキル60.7%、「聞く」スキル21.3%、「読む」スキル11.5%、「書く」スキル6.6%であった。前項にてまとめた重みづけを行った集計と合わせて検討しても「話す」スキルを伸ばしたいと考えていることが顕著な結果として表れた。

表6 伸ばしたいスキル（1と回答したもの）

	話す	聞く	読む	書く
中上級	47.4	15.8	10.5	26.3
中級	67.8	16.9	10.2	5.1
初級	56.8	29.5	13.6	0.0

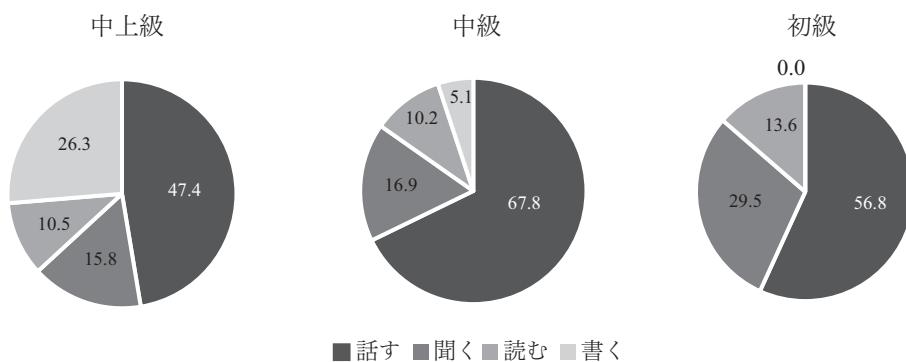


図3 伸ばしたいスキル（1と回答したもの）

最も伸ばしたいと考えているスキルのみによる結果について、英語習得レベル別に見ると初級レベルにおいては、「書く」スキルを除く3技能のみが挙げられる結果となった。英語習得レベルが上がるに従い、4技能すべてが表れ、他のスキルへの興味が広がっていく傾向にあるということが図3により明らかとなった。

4.2. 学習時間の割り当て

続いて、調査協力者に対し「話す」「聞く」「書く」「読む」の4技能について、英語の自主的な総学習時間を100とした場合に、どのような時間配分で学習をしているかということについて尋ね、回答を得た。全回答者の学習時間の割り当ては、「読む」スキル40.8%、「聞く」スキル28.4%、「書く」スキル16.8%、「話す」スキル14.0%という結果であった。前章において、どの英語習得レベルにおいても「話す」スキルを伸ばしたいと考えていることが明らかとなったが、実際に学習時間を割いているのは「読む」スキルに対してであることがわかった。

表7 実際の学習時間の割り当て

	話す	聞く	読む	書く
中上級	18.1	38.3	26.3	17.3
中級	13.1	28.7	42.0	16.1
初級	13.8	25.0	43.8	17.5

(%)

図4を見ると、初級と中級においては「読む」スキルに学習時間を当てていることがわかる。一方で、「話す」スキルを伸ばしたいと考えているものの「話す」スキルには学習時間を割いていないというところが見て取ることができる。中上級レベルにおいては、「聞く」スキルに最も学習時間を割いていることが示された。また、このレベルにおいても初級・中級レベルと同様に、「話す」スキルを伸ばしたいと考える一方で、そのスキルに対しての学習はあまり行っていないという結果となった。

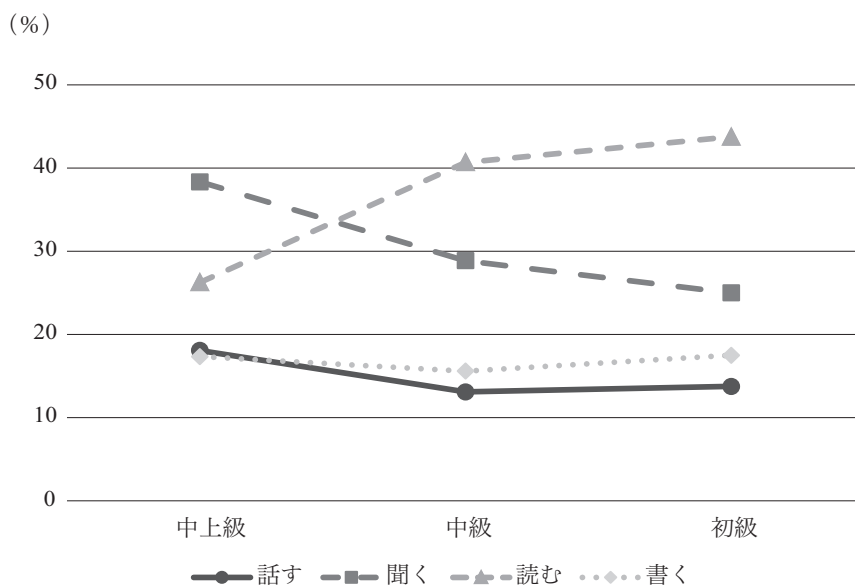


図4 実際の学習時間の割り当て

4.3. 伸ばしたいスキル「理想」と学習時間の割り当て「実際」の比較

これまで述べてきた大学生が伸ばしたいと考えているスキル「理想」と実際学習に割いている学習時間の割り当て「実際」について比較をしていく。伸ばしたいスキル「理想」（1のみ）と、実際に学習している内容「実際」の関連性について各英語習得レベル別に比較を行ったものが図5である。

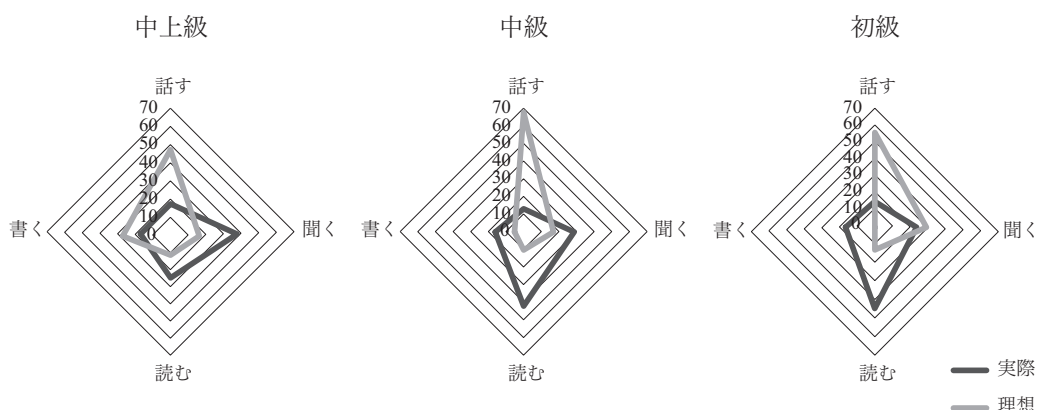


図5 伸ばしたいスキル「理想」と実際の学習内容「実際」の比較

回答を得た「理想」と「実際」をレーダーチャートにより比較すると、「話す」スキルの向上への「理想」が高く表れていることがわかる。しかしながら、自律的な学習において「話す」スキル向上に学習時間を当てているかという点、初級・中級レベルにおいては「読む」スキルに多くの学習時間が当てられていることがわかり、中上級レベルでは「聞く」スキルに学習時間を当てていることが図5より明らかとなった。

初級・中級レベルの図を比較すると、似たような傾向を表す結果となった。これは中級レベル程度までは、語彙力や文法力が十分定着していない可能性があり、英語を「読む」ことに時間がかかるということが推測できる。そのため、自律的な学習においても英語を「読む」だけで時間がかかり、「話す」スキルを向上させたいと考える一方で、その前段階において時間を割かなくてはならない英語習得レベルであるということが考えられる。

一方で、中上級レベルは他の英語習得レベルと比較して、バランスの取れた形で結果が表れた。中上級レベルにおいても「理想」と「実際」に開きはあるものの、それぞれのスキルの学習に一定の時間を割きながら学習をすることができていると言える。

4.4. 学習内容についての追加アンケート調査結果

前節までまとめてきた Google Form を用いたオンラインにてアンケートの協力者のうち、さらなる協力も可能であると回答した大学生を対象として、具体的な学習内容についての自由記述形式のアンケートへの協力を依頼した。本アンケートには19名の協力を得ることができ、この19名に対しては個別にEメールで Google Form によるオンラインアンケートの URL を送

付した。

「4技能のうち、どのスキルを伸ばしたいか」という質問に対して、自由に回答された伸ばしたいと考えている学習内容について、それらが4技能のうちどれに当てはまるかを判定し、英語習得レベル別にまとめた(表8)。表8には4技能に加えて、横断的知識というスキルの項目を設定した。本稿における横断的知識とは、4技能すべてに跨るような学習を指す。回答者数が異なるため、比較が容易にできるよう回答者総数の何%がその学習内容を実施しているかということをもとめたものが図6である。なお、ここでまとめている追加のアンケートは、学習時間については特に考慮していない。

表8 自由記述の集計結果

	話す	聞く	読む	書く	横断的知識
中上級	5	2	1	0	3
中級	1	5	0	0	4
初級	0	1	0	0	5

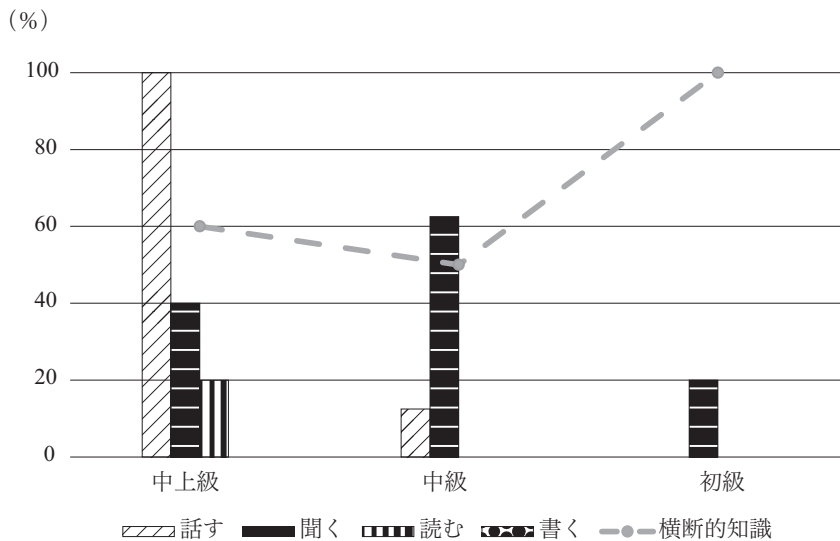


図6 自由記述の集計結果(全体を100%で集計)

上記の表8及び図6から、どの英語習得レベルにおいてもTOEIC等の問題集等、4技能すべてに跨るような横断知識的な学習に取り組んでいることがわかった。しかしながら、初級・中級レベルにおいては、実施している学習内容に偏りがあり、「聞く」スキルの学習に取り組んでいると思われる様子は見て取れるものの、一定の傾向を表す結果は得られなかった。それに対して、中上級レベルの回答者からは、複数のスキルの学習を実施しているという回答が得られ、初級・中級レベルの回答とは異なる結果となった。全体へのアンケート結果から中上級レベルにおいても「話す」スキルを伸ばしたいと考えていることが示されたが、他のレベルと

比較して実際の学習内容にて「話す」スキルを向上させる学習に取り組んでいることがわかった。

表8に記載された具体的な内容が表9である。「どのような学習方法で英語を勉強しているか」という質問に対して、自由に回答された学習方法について、英語習得レベル別にまとめた(表9)。

表9 英語学習で実施していること(自由記述のまとめ)

	中上級	中級	初級	合計
英会話	3	1	0	4
音読・シャドーイング	3	0	0	3
英語の記事を読む	1	0	0	1
洋画・洋楽・YouTube	2	3	1	6
単語(帳)	1	1	1	3
リスニング	0	2	0	2
TOEIC・問題集	2	3	3	8
SNS(英語学習関連)	0	0	1	1
合計	12	10	6	28

表9を見ると、英語学習レベルが高くなるに連れて、様々な英語学習コンテンツを利用して学習に取り組んでいることがわかる。反対に、初級レベルでは限られた英語学習コンテンツしか挙げられておらず、英語習得レベルが十分でなくても比較的取り組みやすいと思われるコンテンツを使用する傾向にあることがわかった。また、どの英語学習レベルにおいても、「TOEIC・問題集」には取り組んでいることが明らかとなった。これは、大学生が調査の対象であり、TOEICをはじめとする英語検定試験等において良いスコアや点数を取得することを目的とし英語を勉強している可能性が高いことから、このような結果となったと考えられる。

5. 考察

5.1. 伸ばしたいスキル

昨今の学校における英語教育は、新学習指導要領実施の時期と相まって様々な部分での改革がなされている。小学校においては、教科としての英語がスタートし、授業内容が「聞く」「話す(やり取り)」「話す(発表)」「読む」「書く」の4技能5領域化され、英語を使用して自らの意見を表現するということが重視されるものとなっている。それに伴い、中学校、高等学校においても「話す」「聞く」スキルを伸ばすための学習内容が増え、これまでよりもインプットした知識をアウトプットできるようにするための学習内容へとシフトしている。このような背景より、大学生もアウトプットするスキル、特に「話す」スキルが十分でないと感じていることから、「話す」スキルを向上させたいと考えている可能性があると考えられる。

本研究では、伸ばしたいと考えている英語のスキルについて英語習得レベル別に集計を行ったが、ここからは初級・中級レベルの大学生は「話す」と「聞く」スキルを向上させたいと思う傾向にあることが表れた。一方で、中上級レベルになると「話す」スキルに加えて、「書く」スキルを伸ばしたいと考えていることが明らかとなった。中上級レベルの大学生が、このように考える理由としては、これまでの学習において十分なインプットがあることから、それらのインプット知識を駆使して英語を使用できるようになりたいと考えているものと推察できる。十分蓄えたインプット知識をアウトプットする方法を自律的な学習においても実践しているのではないかと考える。

5.2. 学習時間の割り当て

「話す」「聞く」「書く」「読む」の4技能を自律的な学習の中で、どのような時間配分で学習をしているかという質問に対しては、全体としては「読む」スキルが最も時間を割いているスキルとなった。特に、初級・中級レベルにおいては、40%を超える割合で「読む」スキルに取り組んでいるとの回答であった。これは、語彙力や文法力が安定していないことから、辞書で意味を調べたり、文法参考書などを用いて文章全体が表している意図を読み取ったりすることに時間を費やしている可能性が高いため、「読む」スキルの学習時間が長くなっていると考えられる。一方で、中上級レベルの回答は、「聞く」スキルに時間を割いているというものであった。この理由として考えられることは、「話す」「書く」というアウトプットのスキルは自律的な学習、つまり一人で学習をする場合は、実施がしにくいものと言える。そのため、一人での学習が取り組みやすい「聞く」スキルに、時間をしっかりと充てて学習していると思われる。

5.3. 実際の学習内容

追加調査として、一部の協力者に自由記述にて詳しい自律的な英語の学習内容を尋ねたところ、初級・中級レベルでは「聞く」スキルの学習に時間を割いているという結果が得られ、中上級レベルにおいては「話す」「聞く」「読む」と複数の学習内容に取り組んでいるということがわかった。中上級レベルの回答は、学習時間の割り当てと同様の傾向が表れる形となったが、異なる結果となった。

また、英語習得レベルが高くなるのと比例して、多様なコンテンツを用いて英語学習に取り組んでいることが明らかとなった。中上級レベルは、「英会話」「音読・シャドーイング」「英語の記事を読む」「洋画・洋楽・YouTube」「単語(帳)」「TOEIC・問題集」と実施している学習内容は多岐に渡っている。中上級レベルの学生は、自分の英語力を客観的に分析することができ、得意とするスキルと不得意とするスキルを把握できている可能性があり、得意部分をより伸ばし、不得意部分を補う学習に取り組んでいることから、様々なアプローチの学習内容が挙げられたものと思われる。また、どの英語学習レベルにおいても、「TOEIC・問題集」という回答が複数あり、大学生が各種英語検定試験等を重視していることが窺える。

6. まとめ

本稿では、大学1～4年生を対象として、英語の学習実態に関する①特にどのスキルを伸ばしたいと考えているか、②どのような時間配分で実際に英語学習をしているか、③どのような教材を使用して英語学習をしているか、という3点を中心としたオンラインによるアンケート調査への回答を得た。この調査結果から、大学生は英語の4技能のうち「話す」スキルを最も伸ばしたいと考えていることが明らかとなった。その一方で、実際に取り組んでいる英語学習は「読む」スキルを伸ばすための学習であった。この結果は、特に初級・中級レベルに顕著に表れていたことから、語彙力や文法力が十分定着していない可能性から自律的な学習においても英語を「読む」だけで時間がかかり、最も伸ばしたいと考えている「話す」スキルのトレーニングまで至っていないのではないかということが示唆することができる。中上級レベルにおいても「理想」と「実際」のスキルに開きはあるが、それぞれのスキルの学習に一定の時間を割くことができている、学習者のレベルによって自律的な学習の時間の充当方法も異なることを示すことができた。

大学生が実際に取り組んでいる学習内容に関しては、英語習得レベルが高いほど、様々なコンテンツを利用していることがわかり、初級レベルに至っては、ほとんど同じものしか取り組んでいないという結果であった。本研究の調査では、英語専攻ではない大学生がどのくらい自律的な英語学習を実践しているかについて焦点を当てたため、自律学習を行っていないという回答については触れていないが、アンケートの中では自律的な英語学習を行っていないと125名中13名が答えていた。英語学習に取り組んでいない理由として主に挙げられていたものは、「勉強の仕方がわからないから」と「外国人と会話する機会がないから」であった。大竹・松野(2021)の単位取得を伴わない非正規のリメディアル英語科目を自発的に受講した学習者と受講しなかった学習者における学習意識に関する比較調査において、受講しなかった学習者は「英語学習の方法が分からない」と感じているという結果が示されている⁽⁸⁾。また、受講するに至らなかったものの「学習をしたくない」わけではなく、「学習したい」と考えているが、その方法が分からないことが英語学習の機会への自発的かつ積極的な参加を阻害しているとも指摘している⁽⁹⁾。このことから、初級・中級英語学習レベルの学習者が自律的な学習に取り組んでいない主な理由は、英語それ自体の必要性やメリットは感じているものの、具体的に自分自身が何に取り組めば良いのかという学習方法が分からないことではないかと考える。

実用的な英語を使用できるレベルに達するためには、学校教育での授業時間だけでなく、学習者自身による自律的な学習時間、また効果的な学習内容が必要不可欠となることは言うまでもない。今後は、今回調査対象とした大学生がいかに自律的な学習者になり得るかについて、自律的な学習者として英語学習に取り組んでいる社会人英語学習者との比較を通して、検討していくことが必要になると考える。このような比較を通して、生涯学習としての位置づけもされつつある英語学習に自らの目的、目標を持って取り組むことができる学習者の育成を目指して大学での英語教育の在り方を検討していくことを今後の課題としたい。

謝辞

本研究を実施するにあたり、オンラインアンケートにご協力いただきました学生の皆様に厚く御礼申し上げます。

注

- (1) 坂田浩・福田 T. スティーブ (2011) 「継続的英語自律学習を支援するためのワークシート」『徳島大学国際センター紀要・年報』 p. 15
- (2) 加藤あや美・山田敦子 (2021) 「社会人英語学習者の学習実態—伸ばしたいスキルと学習内容の差異について—」『桜花学園大学保育学部研究紀要』第24号
- (3) ベネッセ教育総合研究所 (2019) 「高1生の英語学習に関する調査〈2015–2019継続調査〉」 p. 15 https://berd.benesse.jp/up_images/research/part1.pdf
- (4) 国立教育政策研究所 (2016) 「平成28年度 大学生等の学習状況に関する調査研究—結果の概要(大学昼間部)—」 p. 4 https://www.nier.go.jp/05_kenkyu_seika/pdf_digest_h29/gaiyou.pdf
- (5) 同上 p. 7
- (6) 同上 p. 8
- (7) 稲葉みどり (2021) 「大学生の自己調整学習の分析—英語学習における動機づけ・メタ認知・学習方略—」『教養と教育』21巻 p. 1
- (8) 大竹彩加・松野和子 (2021) 「外的調整による外発的動機づけに依拠しないリメディアル英語教育—非正規科目の受講を自発的に選択した学習者における学習意識—」『静岡大学教育研究』17巻 p. 26
- (9) 同上 p. 26

参考文献

- 稲葉みどり (2021) 「大学生の自己調整学習の分析—英語学習における動機づけ・メタ認知・学習方略—」『教養と教育』21巻
- 大竹彩加・松野和子 (2021) 「外的調整による外発的動機づけに依拠しないリメディアル英語教育—非正規科目の受講を自発的に選択した学習者における学習意識—」『静岡大学教育研究』17巻
- 加藤あや美・山田敦子 (2021) 「社会人英語学習者の学習実態—伸ばしたいスキルと学習内容の差異について—」『桜花学園大学保育学部研究紀要』第24号
- 坂田浩・福田 T. スティーブ (2011) 「継続的英語自律学習を支援するためのワークシート」『徳島大学国際センター紀要・年報』
- 国立教育政策研究所 (2016) 「平成28年度 大学生等の学習状況に関する調査研究—結果の概要(大学昼間部)—」 p. 4 https://www.nier.go.jp/05_kenkyu_seika/pdf_digest_h29/gaiyou.pdf (情報取得日 2021/12/31)
- ベネッセ教育総合研究所 (2019) 「高1生の英語学習に関する調査〈2015–2019継続調査〉」 https://berd.benesse.jp/up_images/research/part1.pdf (情報取得日 2021/12/31)

(受理日 2022年1月5日)